やってみよう! Pacemaker による 高可用クラスタ構築 ~OpenShift Virtualization 編~

2025-10-17 OSC2025 Online/Fall Linux-HA Japan プロジェクト 山本 拓也







自己紹介

- 名前
 - 山本 拓也(やまもと たくや)
- 経歴
 - 2024年4月にNTT OSS センタに配属
 - ・配属後, Pacemaker と OpenShift に初めて出会いました

•OSC は今回が初参加なのでお手柔らかにお願いします

目次

1. OpenShift Virtualization (OCP-V) とは?

2. Pacemaker の役割

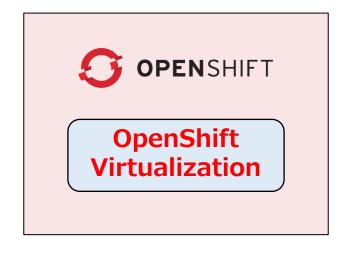
3. OCP-V 環境で Pacemaker を使ってみよう

4. おわりに

OpenShift Virtualization (OCP-V) とは?

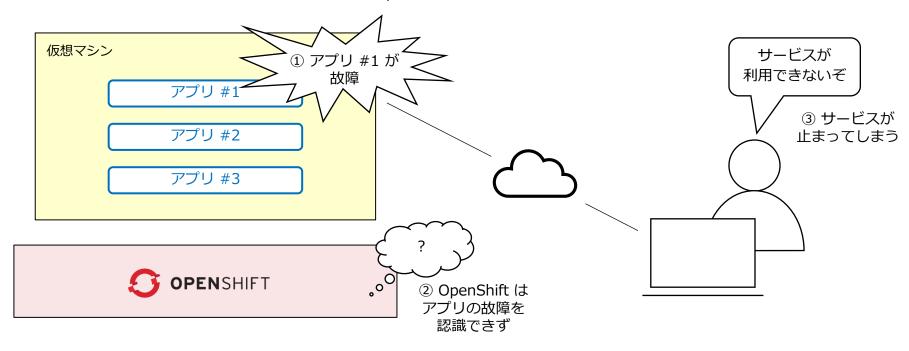
OpenShift Virtualization (OCP-V)

- 仮想マシンを起動・管理する OpenShift の機能の一つ
 - OpenShift: Red Hat 社が提供しているコンテナと仮想マシンを 管理可能な統合プラットフォーム
- 仮想マシン本体が故障しても復旧することができます
 - OCP-V 以外の OpenShift の他の機能と組み合わせることで実現
- しかし, 対応できない故障もあります...



OCP-V だけではカバーできない故障

- 仮想マシン内で稼働しているアプリの故障が検知できません
 - アプリは復旧されないため、サービスが停止





Pacemaker と組み合わせて 高可用クラスタを構築しよう!

Pacemaker の役割

まず高可用クラスタって何?

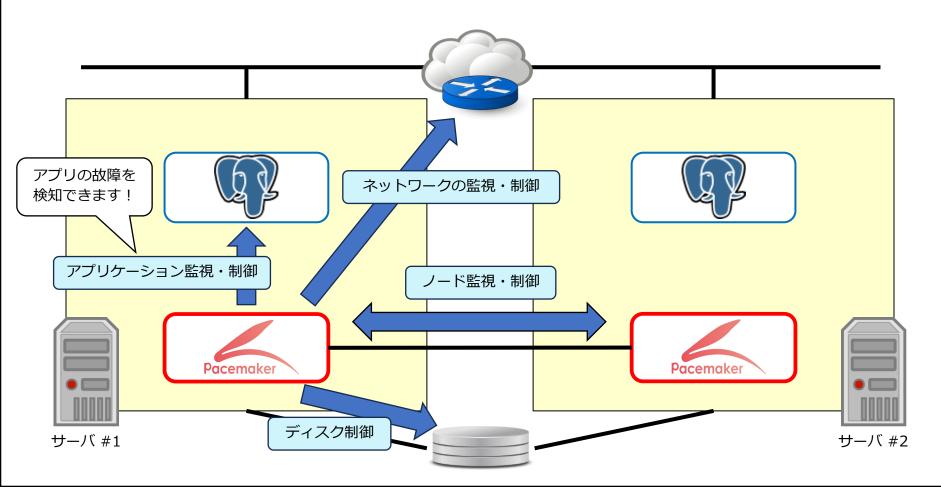
サービスが停止する時間を可能な限り短くすることを 目的としたクラスタです

高可用性 = High Availability

- OCP-V 環境で高可用クラスタを構築するために利用する ソフトが HA クラスタソフトとなります
 - HA クラスタソフトのひとつである Pacemaker を紹介

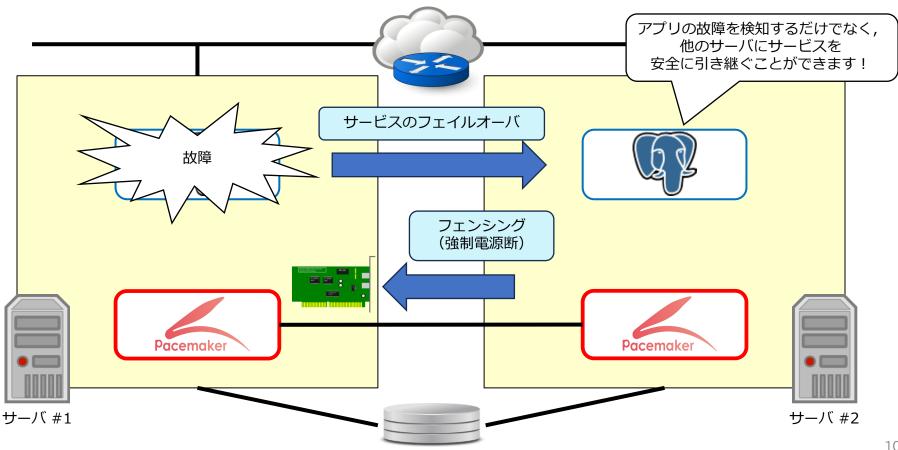
Pacemaker の概要 (1/2)

- オープンソースで開発されている HA クラスタソフト
 - サーバやアプリケーションの監視・制御



Pacemaker の概要 (2/2)

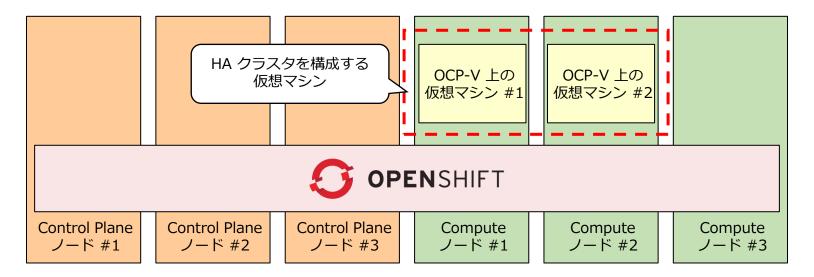
- Pacemaker の役割として,他に以下があります
 - 故障検知時に自動的にフェイルオーバ
 - フェンシング(強制電源断)によるデータの安全性確保



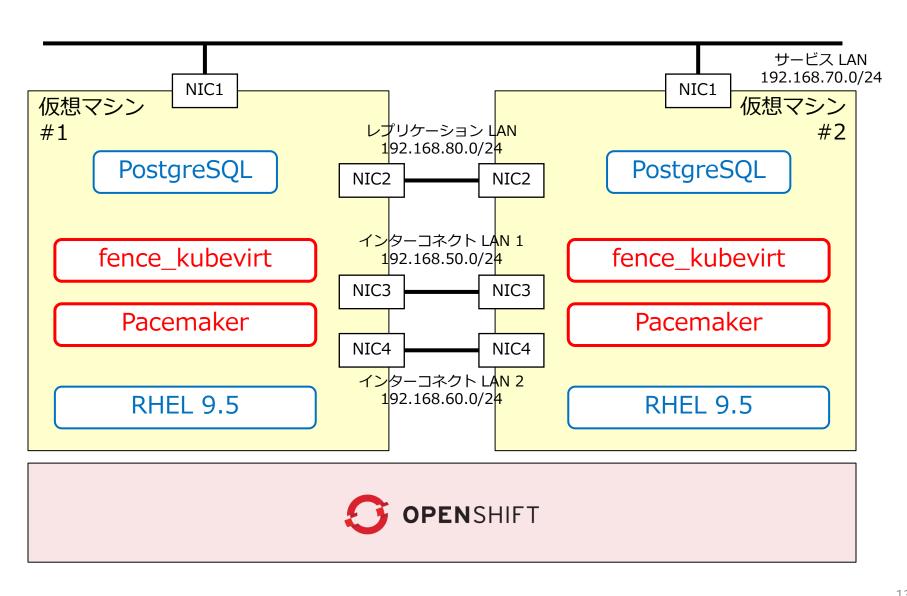
OCP-V 環境で Pacemaker を 使ってみよう

Pacemaker を試す OCP-V 環境

- OpenShift: 4.18.11
 - Control Plane ノード:物理サーバ3台
 - OpenShift の制御や監視,設定などを実施するサーバ
 - Compute ノード: 物理サーバ 3 台
 - ユーザのワークロード(仮想マシンを含むアプリやサービス)を実行するサーバ
- OpenShift Virtualization (OCP-V): 4.18.13
- 作業用端末(RHEL 9.5, OCP-V 環境の管理に利用)



Pacemaker を試す HA クラスタ構成

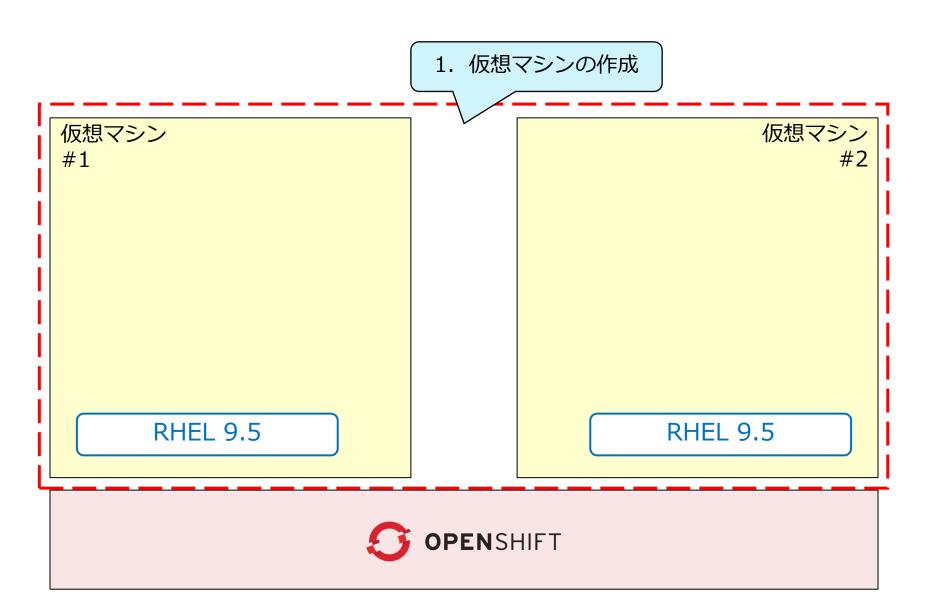


Pacemaker を使用するまでの流れ

- 1. 仮想マシンの作成
- 2. OCP-V 環境に NW を追加
- 3. Pacemaker の設定
- 4. fence_kubevirt の設定
- 5. リソースの設定
- 6. リソース故障のお試し!

※ OCP-V 環境ならではの設定を中心に紹介します

Pacemaker を試す HA クラスタ構成

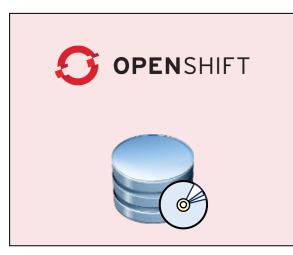


1. 仮想マシンの作成 (1/6)

- 事前に RHEL 9.5 の ISO を入手しておきます
- 基本的な作成方法は以下に沿って作成します
 - Red Hat 社のエンジニアが公開しているブログ

 ゼロからはじめるOpenShift Virtualization (4) OpenShift Virtualizationのインストールと実行 赤帽エンジニアブログ
 - 本発表ではテンプレートから作成する方法を採用







1. 仮想マシンの作成 (2/6)

- クラスタを構築するプロジェクトを選び、事前に用意したISO をアップロードします
 - oc / virtctl: OpenShift / OCP-V 上の仮想マシンを制御するコマンド 作業端末のコマンドラインから実行

パラメータ紹介

- ・rhel-9.5-center-iso: アップロード時のリソース名
- ・--size: アップロード先の確保サイズ
- ・--image-path: アップロードデータのパス
- ・--insecure: アップロード時の検証スキップ

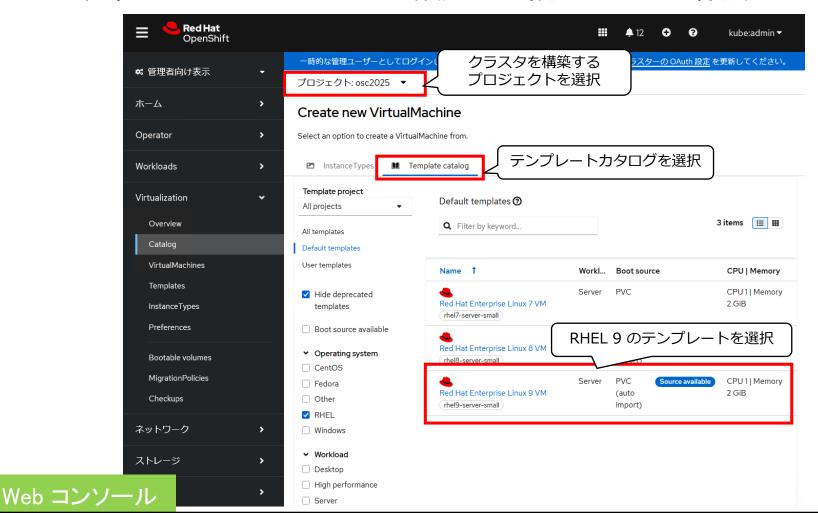
1. 仮想マシンの作成 (3/6)

アップロードが成功していれば、Web コンソール上で 確認することができます



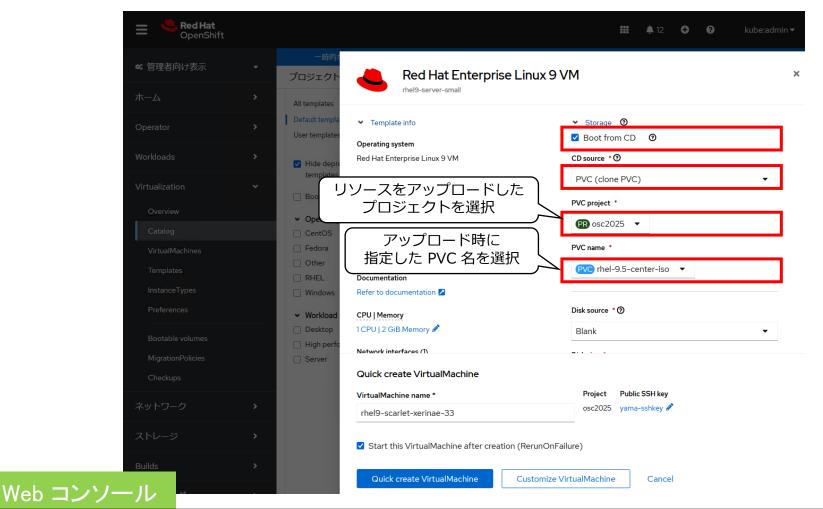
1. 仮想マシンの作成 (4/6)

・Web コンソール上でテンプレートカタログを選択し、 以下のようにパラメータを設定して仮想マシンを作成します



1. 仮想マシンの作成 (5/6)

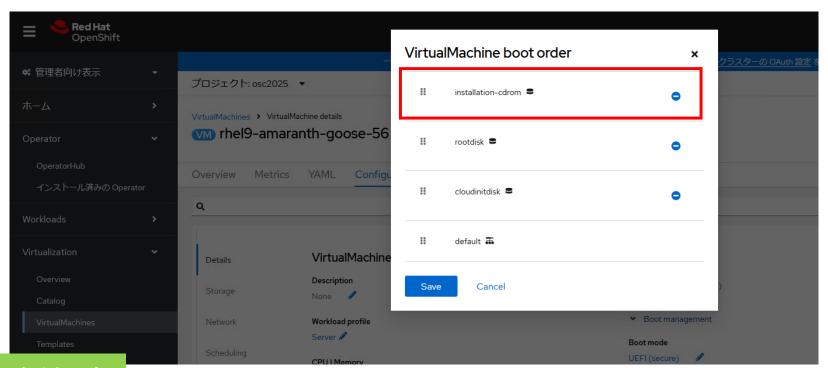
・Web コンソール上でテンプレートカタログを選択し、 以下のようにパラメータを設定して仮想マシンを作成します



1. 仮想マシンの作成 (6/6)

• 注意点

- RHEL のインストール設定が完了した後,システムの再起動が必要となりますが,そのまま再起動すると再度 ISO 起動となります
- そこで仮想マシンを停止し、「installation-cdrom」の「-」を 押して boot order の先頭を「root-disk」に変更してから再起動します

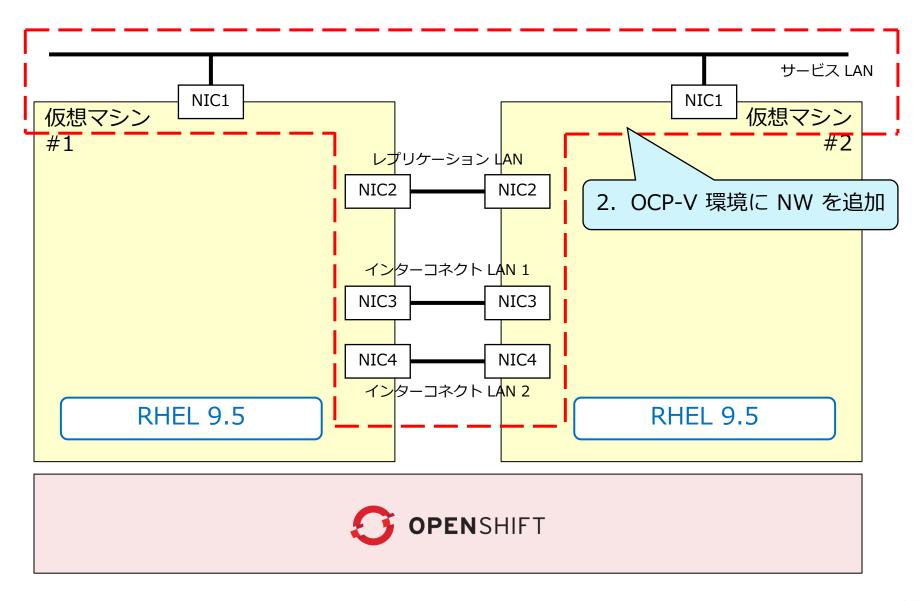


Pacemaker を使用するまでの流れ

- 1. 仮想マシンの作成
- 2. OCP-V 環境に NW を追加
- 3. Pacemaker の設定
- 4. fence_kubevirt の設定
- 5. リソースの設定
- 6. リソース故障のお試し!

※ OCP-V 環境ならではの設定を中心に紹介します

Pacemaker を試す HA クラスタ構成

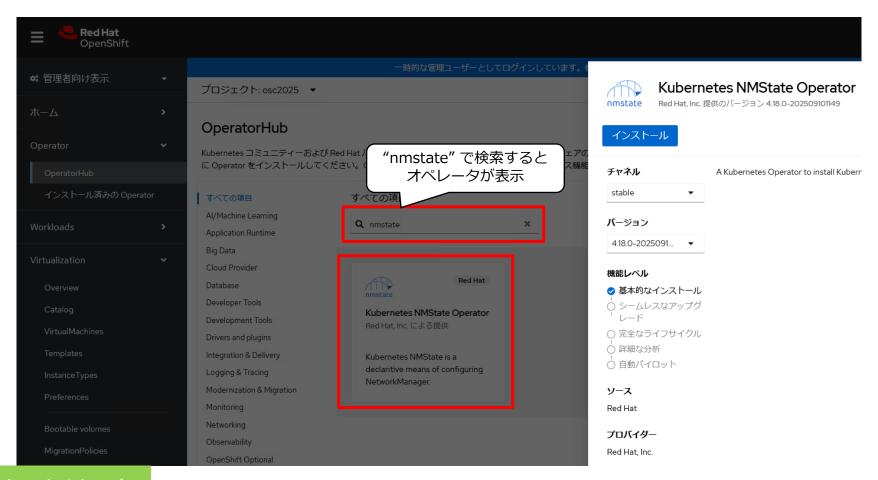


2. OCP-V 環境に NW を追加 (1/8)

- クラスタを作成するためには、用途ごとの NW を用意して 仮想マシンをその NW に接続する必要があります
- NW の追加と仮想マシンの接続を以下の手順で設定します
 - 2-1. OCP-V 環境に NW 設定を行うオペレータをインストール
 - 2-2. OCP-V 環境に NW 設定を適用するポリシーを作成
 - 2-3. 仮想マシンに NIC を追加するための定義を作成
 - 2-4. 仮想マシンに NIC を追加

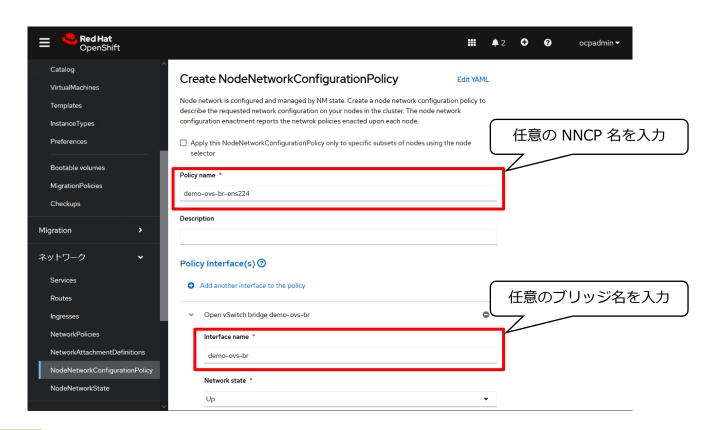
2. OCP-V 環境に NW を追加 (2/8)

Web コンソールで「Kubernetes NMState Operator」を インストールします



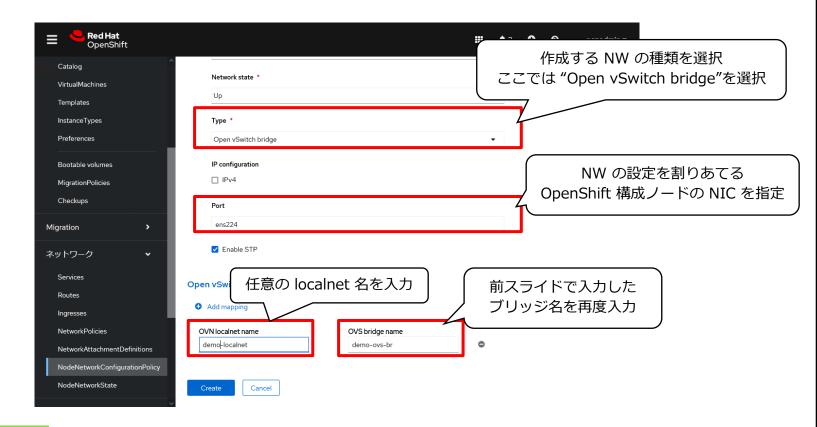
2. OCP-V 環境に NW を追加 (3/8)

- NNCP (Node Network Configuration Policy) を作成します
 - NNCP : OpenShift 構成ノード の NIC に対して設定を行うポリシー OCP-V 上に任意の複数の NW を通すことが可能



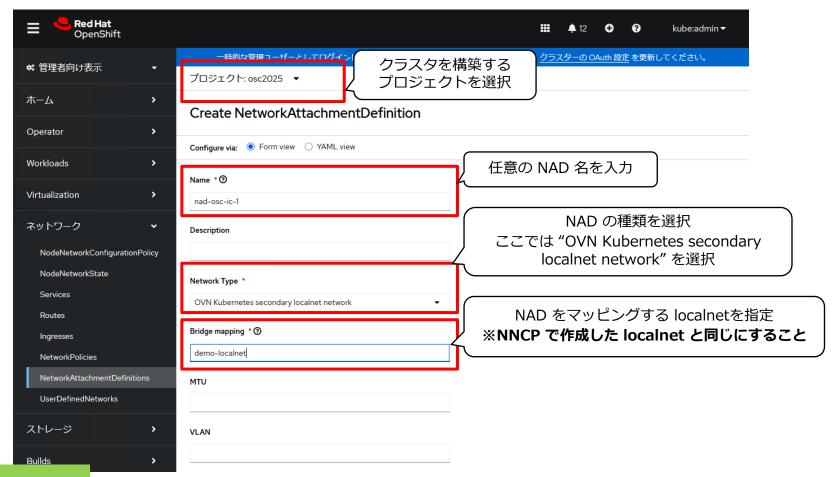
2. OCP-V 環境に NW を追加 (4/8)

- NNCP (Node Network Configuration Policy) を作成します
 - NNCP: OpenShift 構成ノード の NIC に対して設定を行うポリシー OCP-V 上に任意の複数の NW を通すことが可能



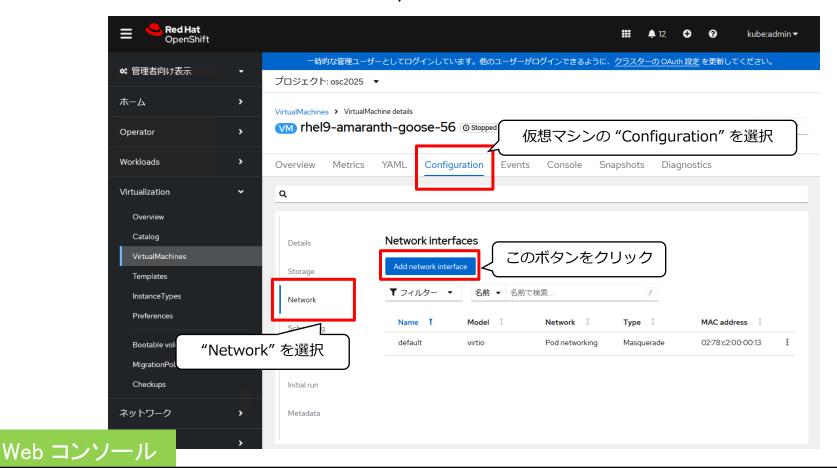
2. OCP-V 環境に NW を追加 (5/8)

- NAD (NetworkAttachmentDefinition) を作成します
 - NAD: OCP-V 上の仮想マシンに追加するための NIC を定義



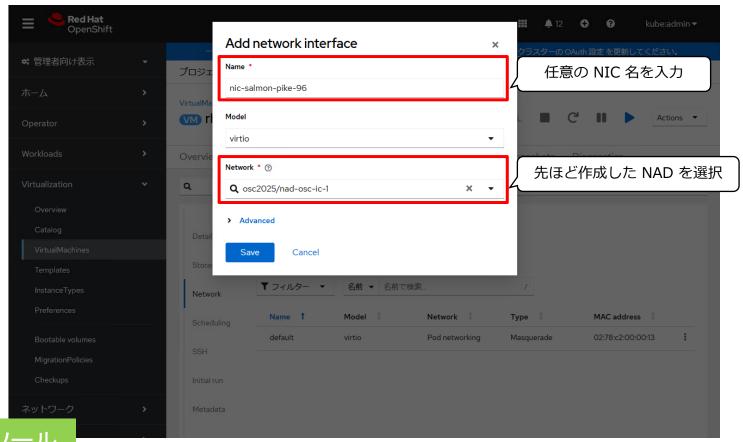
2. OCP-V 環境に NW を追加 (6/8)

- 仮想マシンに NIC を追加し, 仮想マシンを再起動します
 - 追加した NIC の IP アドレスの設定で OCP-V 固有の対応はなし
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施



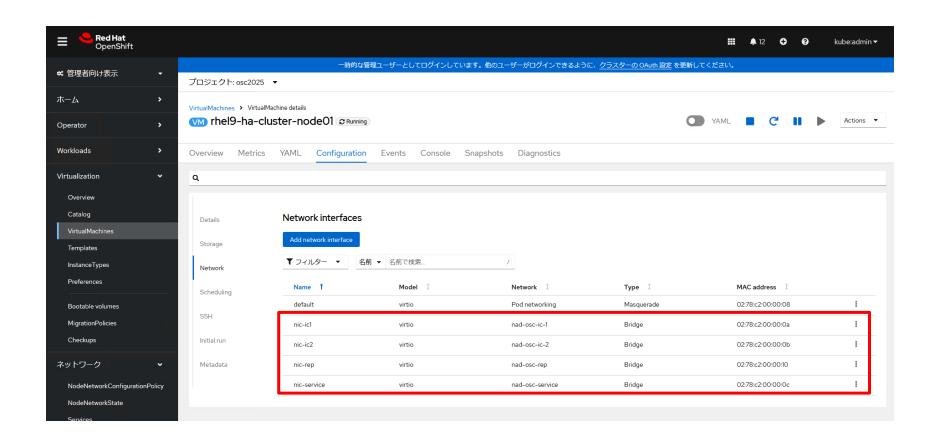
2. OCP-V 環境に NW を追加 (7/8)

- 仮想マシンに NIC を追加し, 仮想マシンを再起動します
 - 追加した NIC の IP アドレスの設定で OCP-V 固有の対応はなし
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施



2. OCP-V 環境に NW を追加 (8/8)

• 新たに NIC が追加されていることを確認します

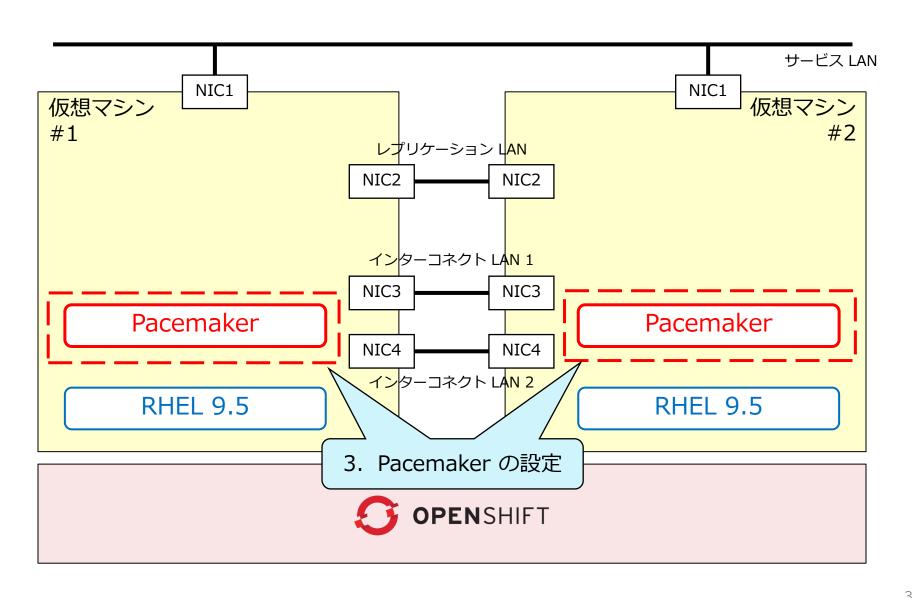


Pacemaker を使用するまでの流れ

- 1. 仮想マシンの作成
- 2. OCP-V 環境に NW を追加
- 3. Pacemaker の設定
- 4. fence_kubevirt の設定
- 5. リソースの設定
- 6. リソース故障のお試し!

※ OCP-V 環境ならではの設定を中心に紹介します

Pacemaker を試す HA クラスタ構成



3. Pacemaker の設定 (1/3)

- Pacemaker に使用するパッケージをインストールします
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施

```
# dnf -y install pcs pacemaker fence-agents-all
# dnf -y install fence-agents-kubevirt
```

- クラスタが利用するポートの設定を行います
 - この手順は仮想マシン #1,2 の両方で実施

```
# firewall-cmd --add-service=high-availability
success
# firewall-cmd --permanent --add-service=high-availability
success
```

仮想マシン

3. Pacemaker の設定 (2/3)

- pcsd.service を起動させます
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施
 - pcsd: Pacemaker/Corosync Configuration System daemon Pacemaker と Corosync を管理するツール
- # systemctl enable pcsd.service --now
 - hacluster ユーザのパスワードを設定します
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施

```
# passwd hacluster
ユーザー hacluster のパスワードを変更。
新しいパスワード:
新しいパスワードを再入力してください:
passwd: すべての認証トークンが正しく更新できました。
```

仮想マシン

3. Pacemaker の設定 (3/3)

- クラスタノードの認証設定を行います
 - この手順は仮想マシン #1, 2 のどちらかで実施

```
# pcs host auth rhel9-ha-cluster-node01 addr=192.168.70.10 ¥ rhel9-ha-cluster-node02 addr=192.168.70.20
Username: hacluster
Password: 設定したパスワードを入力
rhel9-ha-cluster-node02: Authorized
rhel9-ha-cluster-node01: Authorized
```

- 故障検知時のクラスタノードの挙動を設定します
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施
 - Linux-HA Japan の推奨設定

```
# vi /etc/sysconfig/pacemaker
~略~
PCMK_fail_fast=yes
PCMK_panic_action=sync-reboot
```

- ・PCMK_fail_fast=yes: Pacemaker に異常が起きた際に再起動
- ・PCMK_panic_action=sync-reboot メモリ上にある変更内容をディスクに書き込み後、再起動

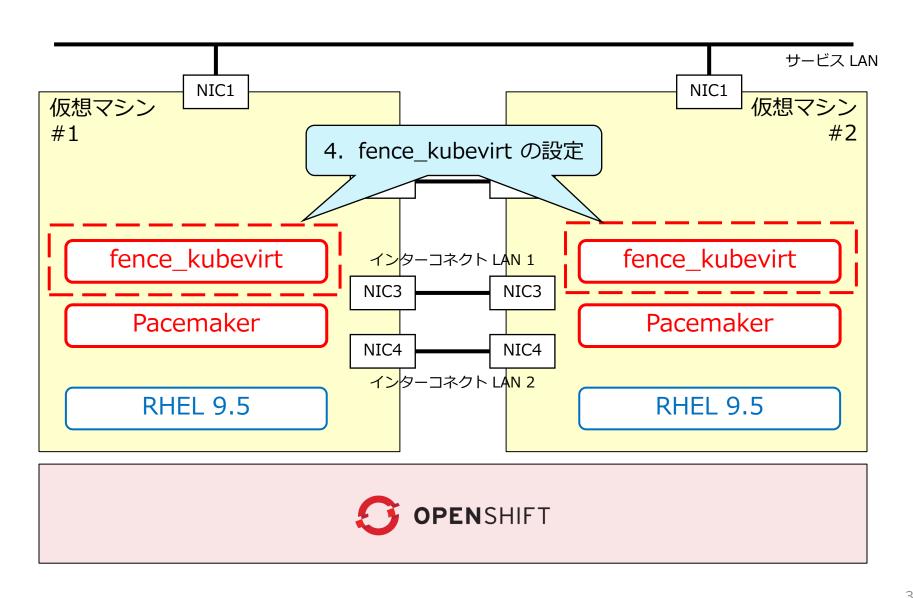
36

Pacemaker を使用するまでの流れ

- 1. 仮想マシンの作成
- 2. OCP-V 環境に NW を追加
- 3. Pacemaker の設定
- 4. fence_kubevirt の設定
- 5. リソースの設定
- 6. リソース故障のお試し!

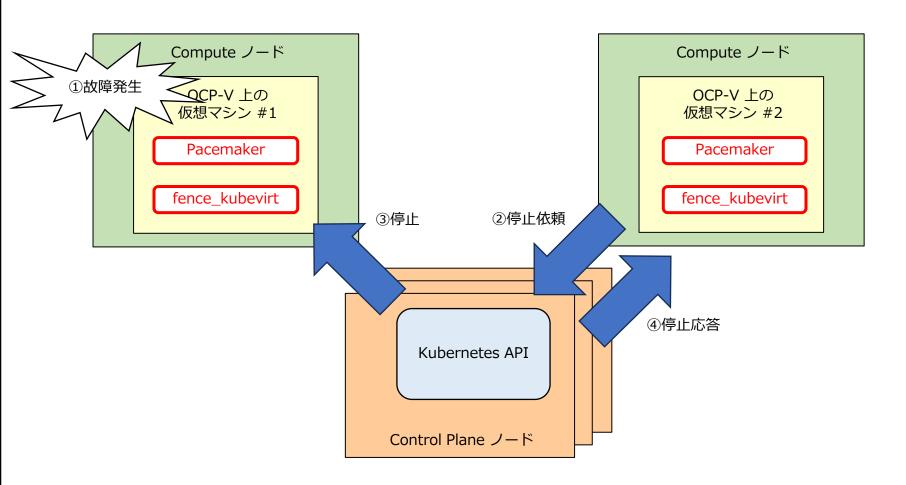
※ OCP-V 環境ならではの設定を中心に紹介します

Pacemaker を試す HA クラスタ構成



4. fence_kubevirt の設定 (1/11)

• fence_kubevirt は Control Plane の Kubernetes API に 依頼して故障したノードをフェンシングします

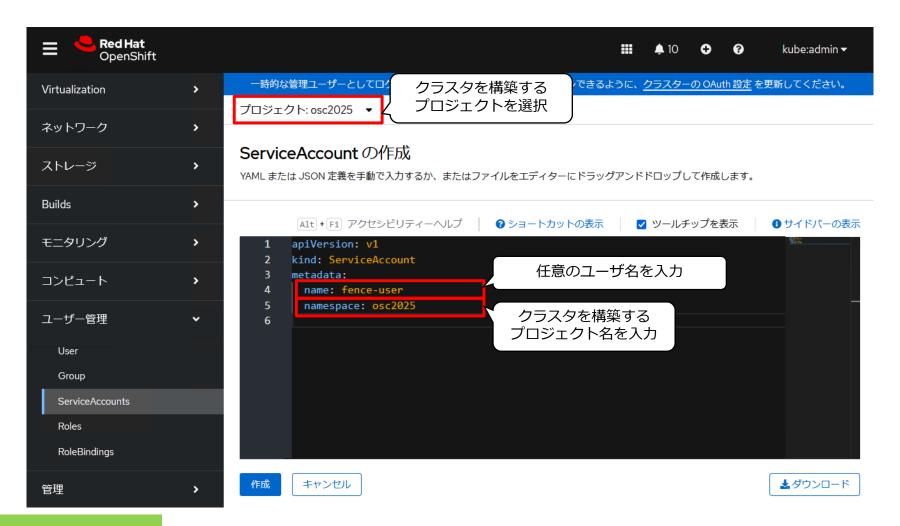


4. fence_kubevirt の設定 (2/11)

- ・仮想マシンから Kubernetes API へのアクセスを許可するために 以下の手順で設定します
 - 4-1. サービスアカウントの作成
 - 4-2. 作成したサービスアカウントに管理者権限を付与
 - 4-3. 仮想マシンにサービスアカウントの情報を追加
 - 4-4. fence_kubevirt が正常に動作するか確認

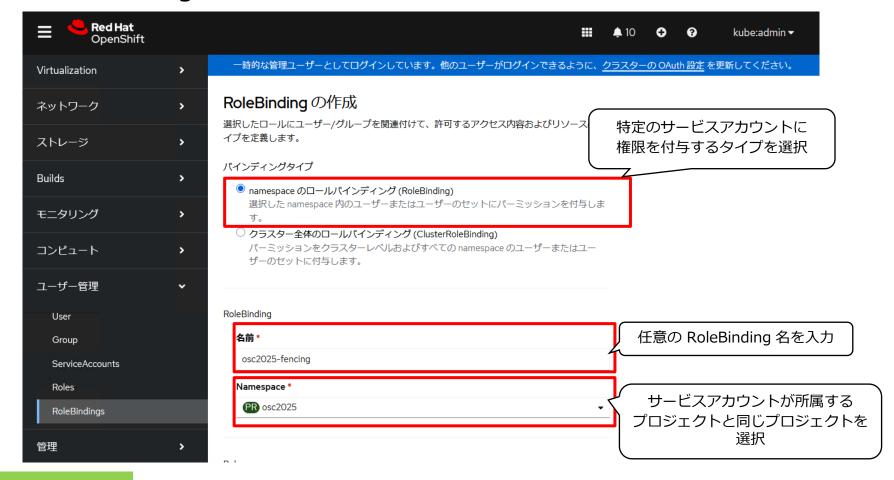
4. fence_kubevirt の設定 (3/11)

サービスアカウントを作成します



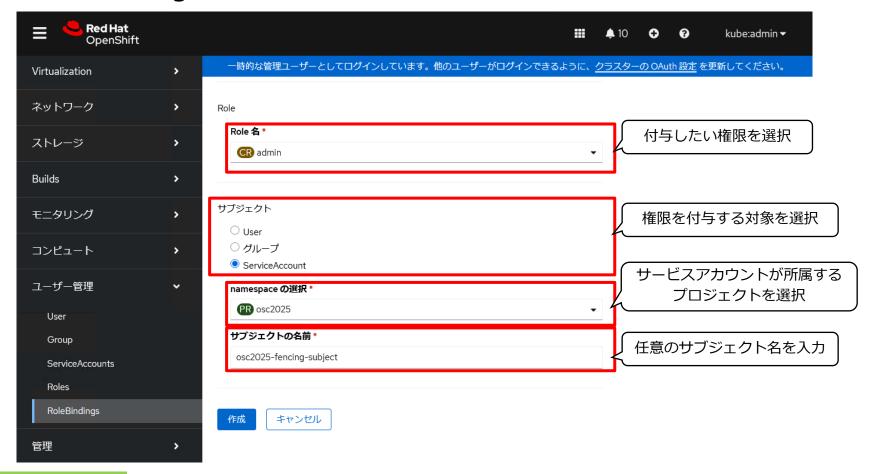
4. fence_kubevirt の設定 (4/11)

サービスアカウントに管理者権限を付与するための RoleBinding を作成します



4. fence_kubevirt の設定 (5/11)

サービスアカウントに管理者権限を付与するための RoleBinding を作成します



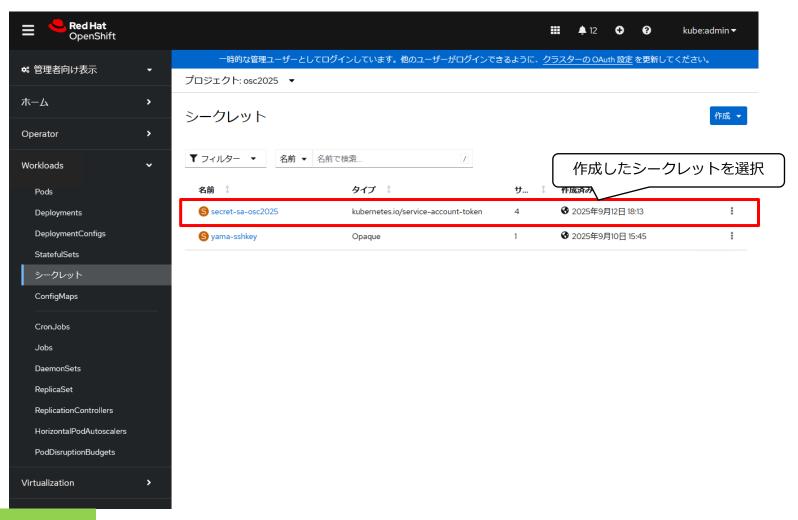
4. fence_kubevirt の設定 (6/11)

- サービスアカウントのシークレットを作成した後に, 管理者権限をサービスアカウントに付与します
 - シークレット:証明書やトークンなどの機密情報を管理するデータ

```
$ vi service-ac-osc2025.yaml
  apiVersion: v1
  kind: Secret
  metadata:
    name: secret-sa-osc2025
    annotations:
      kubernetes.io/service-account.name: "fence-user"
  type: kubernetes.io/service-account-token
$ oc apply -f service-ac-osc2025.yaml
$ oc adm policy add-role-to-user admin -z fence-user -n osc2025
clusterrole.rbac.authorization.k8s.io/admin added: "fence-user"
```

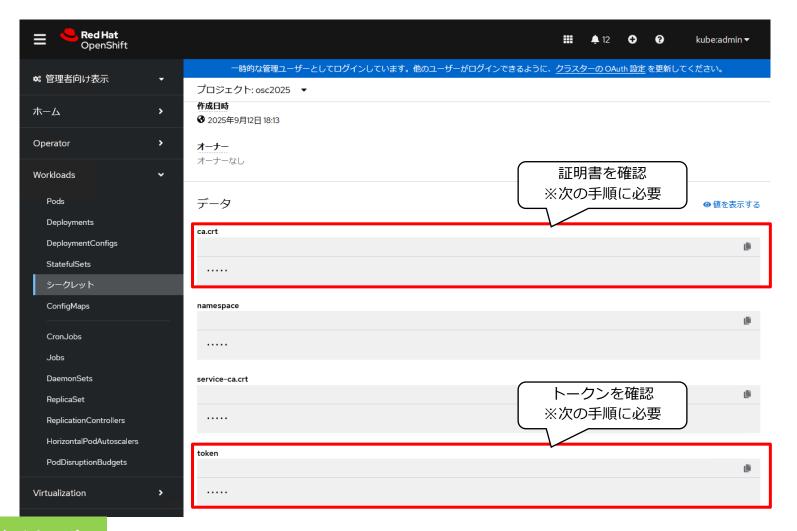
4. fence_kubevirt の設定 (7/11)

• サービスアカウントのシークレットを確認します



4. fence_kubevirt の設定 (8/11)

• サービスアカウントの証明書とトークンを確認します



4. fence_kubevirt の設定 (9/11)

- 証明書とトークンを仮想マシンに追加します
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施

```
# mkdir /root/.kube
# vi /root/.kube/config
apiVersion: v1
clusters:
- cluster:
     #insecure-skip-tls-verify: true
     certificate-authority: /root/rootCA.pem
     server: https://api.ocp.home.lab:6443
   name: <a href="mailto:api.ocp.home.lab">api.ocp.home.lab</a>:6443
contexts:
- context:
     cluster: <a href="mailto:api.ocp.home.lab">api.ocp.home.lab</a>:6443
     user: fence-user/api.ocp.home.lab:6443
   name: <a href="mailto:osc2025/api.ocp.home.lab">osc2025/api.ocp.home.lab</a>:6443/fence-user
  (続く)
```

下線部の情報は環境合わせて読み替えが必要

- ・サービスアカウント名
- ・プロジェクト名
- ・OpenShift サーバドメイン名
- ・証明書のパス

4. fence_kubevirt の設定 (10/11)

- 証明書とトークンを仮想マシンに追加します
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施

```
(続き)
current-context: ocp-virt/api.ocp.home.lab:6443/fence-user
kind: Config
preferences: {}
users:
- name: <u>fence-user/api.ocp.home.lab</u>:6443
  user:
                       トークンを入力
    token: XXXX
# vi /root/rootCA.pem
          証明書を入力
```

4. fence_kubevirt の設定 (11/11)

- 仮想マシンが fence_kubevirt を通して, Kubernetes API に アクセスできることを確認します
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で実施

```
# fence_kubevirt --namespace osc2025 -o status -n rhel9-ha-cluster-node02

Status: ON 仮想マシン #2 の起動状態を確認

# fence_kubevirt --namespace osc2025 -o off -n rhel9-ha-cluster-node02
--disable-timeout=1
Success: Powered OFF 仮想マシン #2 を停止

# fence_kubevirt --namespace osc2025 -o status -n rhel9-ha-cluster-node02

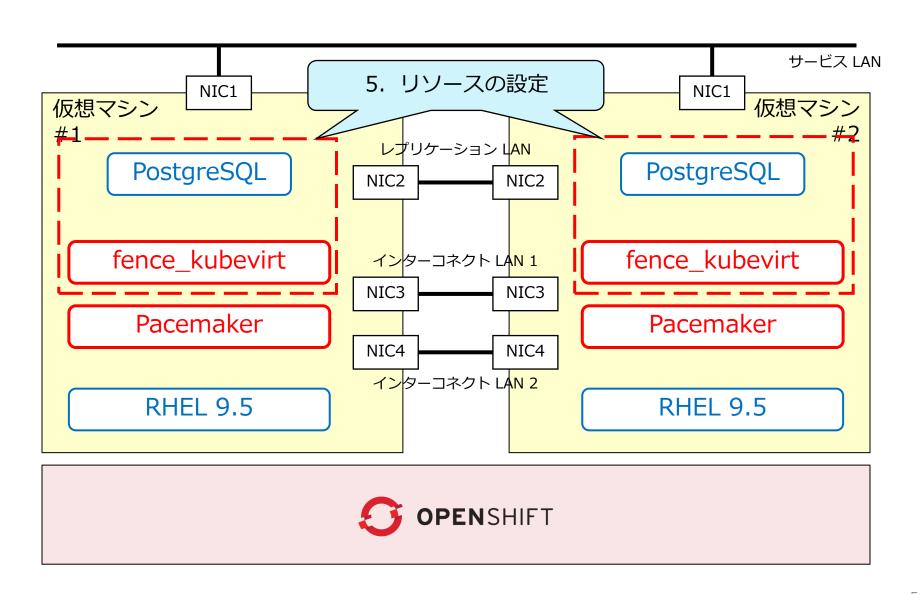
Status: OFF 仮想マシン #2 の停止状態を確認
```

Pacemaker を使用するまでの流れ

- 1. 仮想マシンの作成
- 2. OCP-V 環境に NW を追加
- 3. Pacemaker の設定
- 4. fence_kubevirt の設定
- 5. リソースの設定
- 6. リソース故障のお試し!

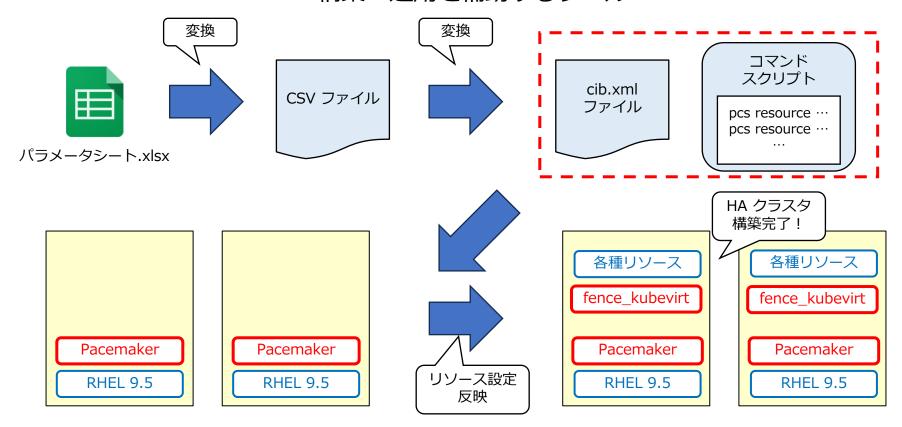
※ OCP-V 環境ならではの設定を中心に紹介します

Pacemaker を試す HA クラスタ構成



5. リソースの設定 (1/6)

- pm_extra_tools を利用して, Excel 形式で記載した パラメータシートをクラスタに入力する形式に変換します
 - pm_extra_tools : Linux-HA Japan が提供している Pacemaker の 構築・運用を補助するツール



5. リソースの設定 (2/6)

- pm_extra_tools をインストールします
 - この手順は仮想マシン #1, 2 のどちらかで実施
 - pm_extra_tools は以下のサイトから入手可能

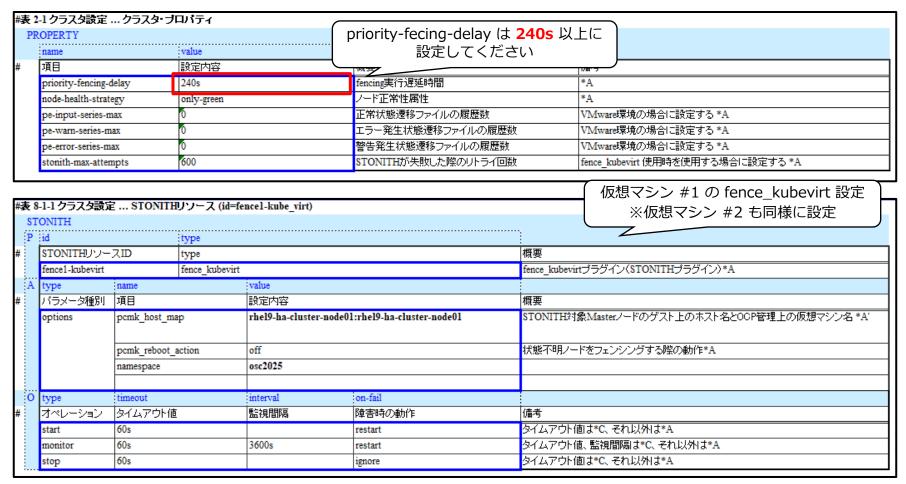
Releases · linux-ha-japan/pm extra tools

```
# dnf install pm_extra_tools-1.6-1.el9.noarch.rpm

# ls /usr/share/pm_extra_tools/
pm_pcsgen.conf pm_pcsgen.py pm_pcsgen_sample.xlsx
```

5. リソースの設定 (3/6)

- パラメータシートにリソースの各種パラメータを設定します
 - 抜粋して fence_kubevirt のリソース設定を例を紹介



5. リソースの設定 (4/6)

- 作成したパラメータシートを CSV 形式に変換し、 仮想マシンに転送します
- pm_extra_tools を用いて、CSV 形式のパラメータシートからpcs コマンドスクリプトとリソース定義ファイルを生成します
 - この手順は pm_extra_tools をインストールした仮想マシンで実施

```
# pm_pcsgen pm_pcsgen_env.csv
pm_pcsgen_env.xml (CIB), pm_pcsgen_env.sh (PCS) を出力しました。

Uソース定義ファイル pcs コマンドスクリプト
```

5. リソースの設定 (5/6)

- クラスタを作成し、リソース設定を反映させます
 - ・先ほどまでの手順を行った仮想マシンで実施

```
# pcs cluster setup test_cluster rhel9-ha-cluster-node01 ¥ addr=192.168.50.10 addr=192.168.60.10 rhel9-ha-cluster-node02 ¥ addr=192.168.50.20 addr=192.168.60.20 ~略~
Cluster has been successfully set up.

# pcs cluster start Active ノードとしてクラスタに参加
Starting Cluster...

# pcs cluster cib-push pm_pcsgen_env.xml クラスタにリソース設定を反映
CIB updated
```

• もう一方の仮想マシンでも Pacemaker を起動します

```
# <u>pcs cluster start</u>
Starting Cluster…
```

5. リソースの設定 (6/6)

- 設定が正常に完了した場合は以下のような状態になります
 - この手順は仮想マシン #1, 2 の両方で確認可能

設定したノード数やリソースの内容によって, クラスタのステータス表示は変化

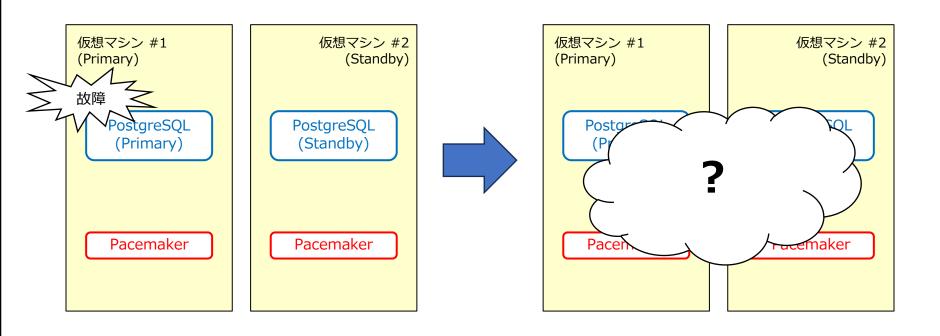
Pacemaker を使用するまでの流れ

- 1. 仮想マシンの作成
- 2. OCP-V 環境に NW を追加
- 3. Pacemaker の設定
- 4. fence_kubevirt の設定
- 5. リソースの設定
- 6. リソース故障のお試し!

※ OCP-V 環境ならではの設定を中心に紹介します

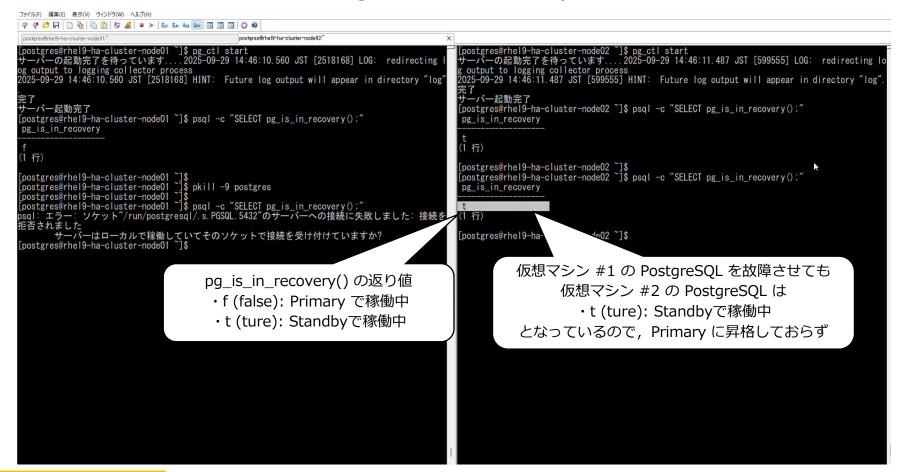
6. リソース故障のお試し! (1/3)

- それでは実際にリソース故障時の動きを確認してみます
 - Pacemaker が未稼働/稼働の状態を比較
 - 期待動作は 仮想マシン #1 の PostgreSQL が故障した際に 仮想マシン #2 の PostgreSQL が Primary に昇格



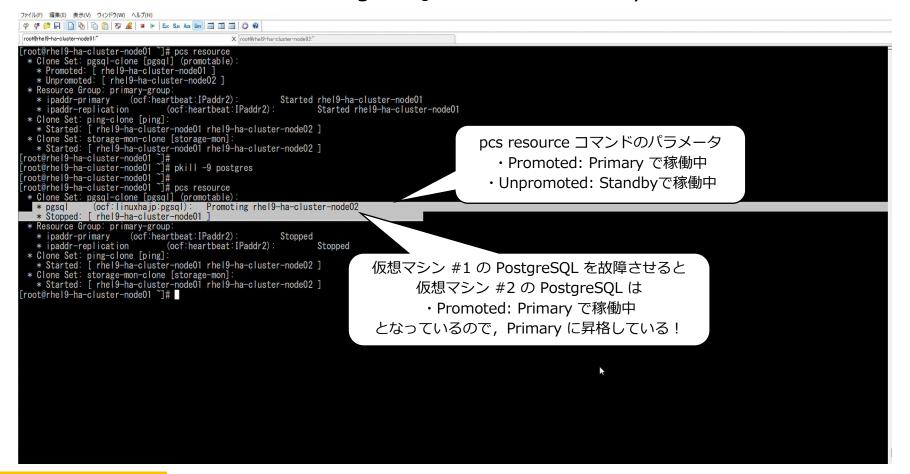
6. リソース故障のお試し! (2/3)

- Pacemaker なしの場合は自動でサービスの継続はできません
 - 仮想マシン #2 の PostgreSQL を Primary に昇格させる必要あり



6. リソース故障のお試し! (3/3)

- Pacemaker ありの場合は自動でサービスの継続ができます
 - 仮想マシン #2 の PostgreSQL が自動で Primary に昇格



おわりに

おわりに

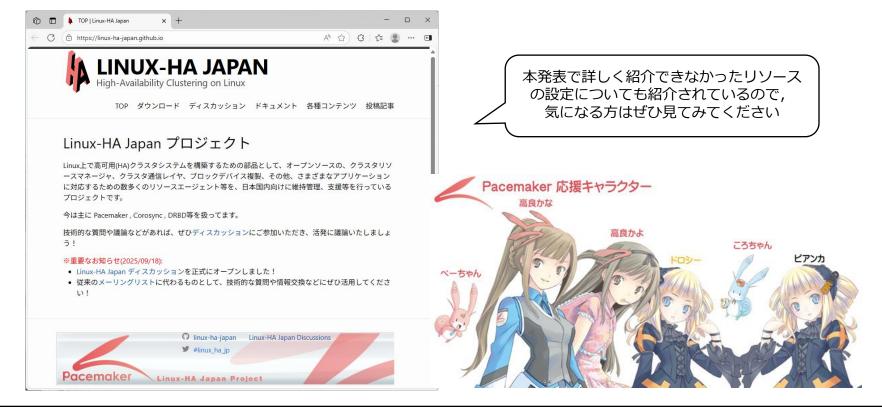
- OCP-V に Pacemaker を組み合わせることで,より可用性の 高いクラスタを構築する方法を紹介しました
- Pacemaker を利用するには、OCP-V 周りの設定が非常に 多くなっています
- ・ただ,上記の設定さえ完了すれば物理サーバ上と同じように Pacemaker を利用できるので,ぜひ活用してみてください!

より Pacemaker について知りたい方はこちらに アクセスしてみてください

https://linux-ha-japan.github.io/

従来のメーリングリストに代わり, 9/18 より新たな情報交換の場もオープンしています!

https://linux-ha-japan.github.io/discussions/



今後も Linux-HA Japan を よろしくお願いします

